

愛知医科大学 学報



竣工間近の新病院（平成25年10月現在）

＝ 第132号 ＝ 2013. 10月

愛知県長久手市岩作雁又1番地1
〒480-1195

学校法人 愛知医科大学

愛知医科大学ホームページアドレス
www.aichi-med-u.ac.jp

■ 主な目次 ■

平成26年度予算編成方針……………	2
尾張旭市 包括連携協定調印式……………	3
平成25年度総合防災訓練……………	5
平成26年度大学院入試……………	6
医学部学外体験実習……………	9
新病院トピックス……………	12
接遇研修の実施……………	17
健康と病気……………	30

平成26年度予算編成方針

平成26年度予算編成については、次の編成方針に基づき編成するものとする。

日本経済は、緩やかに回復しつつありますが、経済再生と財政健全化の両立を目指し、消費税率は平成26年4月に8%に引き上げられることが決定しました。

消費税の本学負担は、主な収入である学納金、医療収入等が、非課税収入とされ、消費税を転嫁することができない仕組みとなっています。一方、医薬品や医療材料、給食材料等の購入については消費税が課税されているため、大学が最終消費者として消費税を負担する形になっています。現在、国は診療報酬に加算する形で消費税の補填としていますが、不十分であり、本学は実質的に年4億円近い消費税を負担しています。8%の税率となりますと仮に本学の活動が平成24年度と同規模だとした場合も6割増えて6億円余の負担となり、これに事業拡大に伴って消費税負担は更に増加することから、確実に本学の財政負担要因となります。

この負担増を乗り越え、本学が永続的に発展・成長し続けるためには、まさに「財の独立なくして学の独立なし」であることから、着実に財政基盤の強化・安定を図っていくことが必要となります。特に、来年度は診療報酬改定の年でもあり、※厚労大臣が診療報酬の引き上げ「ありえる」と述べたとの報道も踏まえて、増収に繋がるものは、積極的に取り組む体制が望まれるところです。

平成25年度の収支見込は、5月からの外来電子カルテの稼働、12月からは精神神経科病棟の休床、更には竣工した新病院棟の管理費が発生するなど新病院への移行に伴うハードルがいくつもあり、前年度並の帰属収支差の確保には相当の頑張りが必要です。更に、将来の財政基盤の強化・安定を図っていくためには支出の8割強を占める人件費と医療経費についても、適正化と効率化の手

を緩めることはできません。

来る平成26年度は、5月に待望の新病院の開院を迎えることから、新病院を橋頭堡として更なる飛躍を期すため、まずは新病院の活性化に繋がる事業を優先し、他の財政支出は事業項目の見直しと効率化を図ることとします。

一方、研究環境の充実を図る目的で整備を進めてきた2号館3号館の施設改修が、平成26年度中に終了し、研究環境が大幅に改善されることから、今後は公的研究費の獲得強化と研究活性化を図る方策を検討することとします。

もとより、教育機関が教育・研究活動の活性化を図り、質の向上に努めるとともに、社会的責任を果たしていくためには、不断の自己点検を行い、改善への努力を行っていくことが必要です。特に、地域社会との連携強化と貢献を目指し、「選ばれる医科大学」であり続けるために、常に、より高度の目標に向けて発展するよう推し進めることとします。

なお、新病院建設に伴う資金計画では、後年度満期の有価証券が早期償還されたので、これを活用し平成22年度に借入れ、平成32年度償還予定の借入金（30億円）を一括償還し、今後の支払い利息等の負担軽減を図ります。また、借入金の返済ピークが平成30年度となること、平成26年からの消費税率アップに対応するため、できるだけ資金の積み上げを行うためにも、平成26年度も特殊要素（新規減価償却費分）を除く、平成25年度と同等条件下で引き続き黒字予算の成立を図ることとします。

※2013.9.6日本経済新聞

平成25年度愛知医科大学公開講座終了

平成25年9月7日（土）・14日（土）・21日（日）・28日（土）の計4回にわたり開催された、平成25年度愛知医科大学公開講座が終了しました。

今年度のテーマは「病気の早期発見と最新医療」と題し、各日2名の講師が講演を行いました。開催期間中は、近隣住民の方を始め、4日間で延929名の方々に出席頂きました。

また、4日間全てに出席頂いた128名の方には、最終日となる28日（土）の講座終了後の閉講式において、石川直久学長から修了証書が手渡されました。

来年度も皆さまの生活に役立つ公開講座を企画していきたいと思っておりますので、多くのご参加をよろしくお願い致します。

Japan Macula ClubにMiyake Medalの設立

網膜の黄斑部はMaculaと呼ばれ、網膜の中で最も視覚に重要な役割を果たす部位です。昨年、ノーベル医学賞を受賞した山中伸弥教授の*iPS*細胞による臨床治験で、加齢黄斑変性が最初の目標となったことにより、黄斑部は国際的にも大変脚光を浴びています。

黄斑部の疾病は多く、米国には古くから“Macular Society”というメンバー制の格式高い黄斑部専門学会がありますが、これにならって日本でも1998年に“Japan Macula Club”という同じ目的の学会が設立され、これまで毎年活発な情報交換を行ってきております。

本学会は、今年で15周年を迎えたことに加え、*iPS*細胞による黄斑部治験が世界で最初の治療応用となったことから、更なる日本の黄斑部研究の活性化を図る目的で、この度“Miyake Medal”を設立しました。これは、本学の三宅養三理事長の名前に因むもので、今後、黄斑部研究・診断・治療に対して輝かしい業績を上げた研究者に毎年一名授与されるものです。

なお、第一回の今年度は三宅理事長が受賞しています。



表



裏

金メダルに三宅理事長の肖像が掘り込まれています。

＝ 地域連携 ＝

尾張旭市 包括連携協定調印式

平成25年10月2日（水）尾張旭市役所にて、尾張旭市と愛知医科大学による、包括的連携協力に関する協定の調印式が行われ、水野義則市長と石川直久学長が協定書に署名しました。

この協定は、両者が包括的連携のもと、保健・医療・福祉の充実を始め、教育・文化の振興、生涯学習の推進、人材育成や地域のまちづくりの推進に関することなど幅広い分野において協力し、地域社会の発展に寄与することを目的としています。

尾張旭市は、平成16年6月にWHO健康都市連合に加盟承認され、同年8月に健康都市宣言を行い、「寝たきりにさせないまちづくり」、「外に出かけたくなるまちづくり」、「住み続けたいくなるまちづくり」の三つの施策に基づいて、様々な事業を展開し、健康都市の実現を目指しています。

石川学長からは、「本日、尾張旭市との包括的連携協定を締結することができ、とても嬉しく思っております。地域との連携を通して、病院機能を十分に発揮し、市民の皆さんへのケアを徹底していきたいと思っております。また、



石川直久学長 水野義則市長

今後どのようにしたら、地域の方々に貢献できるのかをしっかりと考えていきます。いずれにしても、市民の方々が安心して生活できるようになることを信じております。」とあいさつの言葉がありました。

石川直久学長 朝日医学部進学シンポジウム出演

平成25年10月27日（日）午後1時から名古屋東急ホテルにおいて、朝日医学部進学シンポジウムが開催され、パネリストの一人として石川直久学長が出演しました。

今回は、「医療の未来を担う君たちへ」をテーマに、中村正史氏（朝日新聞出版大学ランキング編集長）をコーディネーターに、パネリストとして、石川学長のほか、浅井清文氏（名古屋市立大学医学研究科長）、黒澤良和氏（藤田保健衛生大学学長）、高橋雅英氏（名古屋大学医学部長）、安田龍男氏（株式会社名古屋セミナー理事長）が出演されました。

シンポジウムはテーマに添って、パネリストからそれぞれの大学の特徴や教育方法などについて紹介があり、約300名の参加者は、熱心に聞き入っていました。

石川学長からは、「一番重要なことは、6年間の学生生活を脱落しないことです。また、医学に対する強いモチベーションとリサーチマインドを持ち、チャレンジ精



会場風景（石川学長：壇上右から4番目）

神あふれる方に入学してほしい。」と話があり、本学で実施されている低学年次から医療人としての自覚を高め、学習意欲を高める講義や学生の自主性を伸ばす実習、国際交流の制度などについて紹介がされました。

学長招聘特別講演会開催 國枝秀世先生

医学や看護学の枠組みを越えて、幅広い分野で活躍しておられる著名人の方々を講師としてお招きしております「学長招聘特別講演会」が10月に1回開催されました。

詳細は以下のとおりです。

平成25年10月31日（木）午後5時30分から、大学本館301講義室において、名古屋大学副総長であり、名古屋大学リサーチ・アドミニストレーション室長の國枝秀世先生【写真】を講師にお招きし、「大学における研究支援のあり方について－若手支援による研究力強化を目指して－」と題した講演会が開かれました。

名古屋大学は現在、平成25年度「研究大学強化促進事業」の支援対象機関として採択され、世界水準の優れた研究活動を行う大学として、研究マネジメント人材（リサーチ・アドミニストレータを含む）の確保や研究環境の改革を組合せた研究力強化の取り組みを推進しています。

講演会では、名古屋大学が研究力を強化するために講じている研究者への支援や取り組みに加えて、名古屋大学リサーチ・アドミニストレーション室の活動についても併せて解説を頂きました。

研究支援項目としては、「企画戦略」、「地域連携・情報発信」、「プロジェクト推進」、「知財・技術転移」、「国際産学連携」、「安全保障輸出管理」の六つに分類され、五つの実施グループと1担当による支援体制が整備されています。



國枝秀世先生

また、若手・女性研究者の確保を目的とした人事改革や環境整備を始め、大学の国際化に伴う海外大学との連携や学生の相互派遣などについてもお話を頂きました。

講演後には、活発な質疑応答が行われ、大変貴重な時間を過ごすことができました。

講演会には、関連分野の教職員の参加があり、参加者は熱心に聞き入っていました。

今後も、著名人をお招きして「学長招聘特別講演会」を開催していきます。

平成25年度総合防災訓練実施

学校法人愛知医科大学消防計画第69条に基づき、平成25年10月3日（木）に教職員、学生を始め、近隣の医療機関及び長久手市消防本部の協力を得て、平成25年度総合防災訓練を実施しました。当日は、台風が近づいていたにもかかわらず、晴天となり、総勢約1,000人の参加となりました。

訓練は、昨年度よりも20分早い午後2時に開始しました。東海・東南海地震でマグニチュード9.0、長久手市で最大震度6強の地震を観測し、病院は自ら被災し病院機能が麻痺したという想定のもとで行いました。今年の訓練については、訓練想定を始め、訓練場所、訓練項目等に昨年と大きな変更はなく、新病院の竣工を間近に控えた本学にとっては、この想定での訓練は最後になります。

ただ残念なことに、本部共通訓練のうち実働訓練に参加しない方を対象に行う職員参集状況及び被害状況等の報告書の提出が、昨年度と比較して少ない状況でした。

一方、災害対策本部と各災害対策室との連携確認及び情報の共有では、幾分でも慣れたせいも、昨年度より随分とスムーズに行われました。

今年5月に、内閣府から公表された静岡県沖から九州沖にかけての水深約4,000メートルの海底にある溝（トラフ）で起きるとされる南海トラフ巨大地震の被害想定では、津波高は最大34メートル、死者は最悪32万人、被害総額は最大220兆円と衝撃的な数字が示されました。大変甚大な被害想定ではありますが、耐震化の推進や防災施設の整備、防災訓練の充実などハード、ソフト両面で対策をとれば、死者は約5分の1、被害額は約半分になるとも指摘されています。こうしたなか、患者さんを始め、皆さんの大切な命を守るため、これからもより一層実効性のある訓練の実施に努めて参ります。



災害対策本部



防災訓練の様子

平成26年度大学院医学研究科入学試験 第59回論文博士外国語試験実施

平成25年10月4日（金）、大学本館303講義室において、大学院医学研究科入学試験第1次募集及び第59回論文博士外国語試験が行われました。受験者数は、大学院医学研究科入学試験が14名、論文博士外国語試験が2名となりました。

本学研究科では、まだ定員に満たないことから、第2次募集を今後行う予定です。

また、本研究科では、これまで社会人入学制度や学納金減免制度の拡充などを行い、大学院教育を受けやすい環境を整えてきましたので、研究意欲の高い方が多数応募されることを期待しています。

なお、大学院医学研究科入学試験第2次募集及び第60回論文博士外国語試験は、平成26年2月14日（金）に実施予定であります。

平成26年度大学院看護学研究科入学試験

平成25年9月4日（水）に大学院看護学研究科入学試験が実施されました。

当日は、一般選抜（高度実践看護師コース）5名、社会人特別選抜8名の合計13名が試験に臨み、受験生たちは緊張した雰囲気の中、真剣なまなざしで試験問題に取り組んでいました。

本研究科では、医療等の現場で活躍されている方々が、退職したり休職することなく学べるよう、平日の夜間や

土曜日などにも講義、研究指導等を行っておりますので、より多くの方に受験して頂きたいと考えています。

【看護学研究科入試結果】

○志願者	13名
○受験者	13名
○合格者	12名

平成25年度看護実践研究センター 認定看護師教育課程入学式挙行

平成25年10月1日（火）午前10時から医心館1階多目的ホールにおいて、看護実践研究センター認定看護師教育課程の平成25年度入学式が挙行されました。【写真】

式は、開式の辞に続き、感染管理分野24名及び救急看護分野15名の新入学生が紹介された後、新入学生を代表して、救急看護分野入学生の南和恵さんから「課程設置規程並びに諸規則等を守るとともに、認定看護師を目指す学生としての本分を尽くすことを誓います。」と宣誓が行われました。

次いで、多喜田恵子センター長から「専門知識や技術を極めるだけでなく、状況を読み解く判断力、リーダーとしての資質の向上に努めてください。」と告辞があり、続いて、石川直久学長から「本学の教育環境を十分活用し、社会のニーズに対応できる優れた認定看護師になる



ことを目指して、しっかりと学んでください。」と式辞がありました。

最後に課程の教員紹介があり、午前10時40分ごろ式は終了しました。

平成25年度医学部解剖慰霊祭挙行

秋晴れの好天に恵まれた平成25年10月18日（金）、覚王山日泰寺において、平成25年度の医学部解剖慰霊祭が、本学から医学部長及び解剖学講座を始めとする関係教職員約30名、それに医学部2学年次生111名、看護学部1学年次生4名が参列する中、250名余りのご遺族をお迎えして厳かに執り行われました。

今年度の慰霊祭では、平成24年10月からの1年間に系統解剖と病理解剖にご遺体を供せられた75柱の御霊を新たに合祀し、総数4,728柱の御霊に対し法要が営まれました。

午後2時、導師の入堂により祭儀が始まり、佐賀信介医学部長と北村直哉不老会理事長の慰霊の辞、続いて、学生代表として医学部3学年次北峻志さんが「実習に際して、ご遺体に触れさせて頂いていると、人体を相手にする緊張感や責任感、そして、人一人のお命を支えてきた人体の力強さが、まざまざと指先から伝わってくるようでした。尊い命をかけてご教授くださった命の尊厳さ、ご献体くださった故人のその崇高な思い、ご遺族の思いをしっかりと胸に刻み、医学の進歩に貢献し、患者さんやそのご家族の幸せという大きな希望に変えるため、私たちは日々精進してまいります。」と礼辞を述べ、御霊



ご冥福を祈り焼香する学生

に深い感謝と尊崇の念を捧げました。

この後、広い本堂に僧侶の読経が響きわたる中、佐賀医学部長、解剖学講座を代表して中野隆教授、病理学講座を代表して池田洋教授、学生代表として医学部3学年次生山田早紀さんがそれぞれ焼香し、その後、参列者一人ひとりが焼香して献体者のご冥福を祈りました。

午後3時、佐賀医学部長の参列者に対する謝辞をもってつつがなく慰霊祭が終了し、参列者は、学生が見送る中を帰路につきました。

国際交流



アメリカ南イリノイ大学医学部教員来学 (Southern Illinois University School of Medicine, SIU) ～更なる国際交流の発展と充実を目指して～

本学医学部では、平成17年3月からSIU（南イリノイ大学）との学術国際交流を行っており、SIUからの教員の招聘や相互に学生の派遣・受け入れを行っています。

例年本学からは、5学年次生を対象とした臨床実習に参加するコースと、3・4学年次生を対象としたSIU 2年生カリキュラムを受講するコースの二つのコースへ学生を派遣していますが、この学生の受け入れに多大なご協力を頂いているSIUのDebra Lee Klamen副医学部長（教育・カリキュラム担当）及びGary Michael Rull先生（内科学講座<一般内科>准教授）が、平成25年10月16日（水）、17日（木）に来学され、本学の視察や学生・教員との交流を行いました。

今回の来学では、理事長、学長、医学部長への表敬訪問や、来学された先生方による南イリノイ大学医学部に開発中の新カリキュラムや医学・医療における視覚能力のトレーニングに関する講演が行われました。このようなSIU医学部での取り組みは、同大学内のみならずアメリカ国内の大学において大変評価されているとのこと、本学の医学教育に大変役立っています。

また、来学中には、SIUへ派遣予定である医学部5学年次生に対するケースプレゼンテーションの指導だけでなく、同3・4学年次生に対しても、SIUで行われてい



るPBL（問題立脚型学習）や医療英語の指導をして頂き、更に派遣学生との懇談会も行われました。学生にとっては、緊張の中にも積極的に先生方とコミュニケーションを図ることで、派遣に向けてのモチベーション向上へと繋がったようです。

このように、例年のSIU教員の来学は、両大学の相互交流を深めるよい機会となっています。

今後、医学部では更に多くの学生に海外留学へのチャンスを与え、学生が国際的な視野を広げる一助になるよう一層努力していきたいと考えています。

平成25年度看護学部キャンドルセレモニー挙行

平成25年10月12日（土）午前10時から、大学本館たちばなホールにおいて、2学年次生を対象とした『平成25年度看護学部キャンドルセレモニー』が挙行されました。

当日は、石川直久学長から、「臨地実習を始めるにあたりナイチンゲールの『自分の言葉で表現するよりも行動で示して欲しい』という言葉 皆さんに贈ります。これは看護の心は行動することによって始めて表れるということを示しています。」との式辞が述べられ、続いて、八島妙子看護学部長から、「看護職者は専門職者としての知識や技術は勿論のこと人間としての在り方や生き方に関する深い洞察力と現実を正しく理解する力を養うよう努めていく必要があります。自分に向き合い、自分の可能性を信じて、自分の道を決めていってください。まず、自分自身を大切に、そして一人ひとりが責任を持って看護の基礎を身に付け、更に学び続けるベースを育てて頂きたいと思います。」とのメッセージが学生たちに贈られました。



灯火の引き継ぎ

引き続き行われた『キャンドルサービス』では、学生一人ひとりが八島学部長から手渡された燭台に、ナイチンゲール像から灯火を受け継ぎ、103名全員で『誓いの言葉』を述べ、愛知医科大学看護の歌『愛の使命』を合唱し、10時50分に無事セレモニーが終了しました。

このキャンドルセレモニーは、ナイチンゲールの精神を受け継ぎ、看護職者となるための決意を新たにする場として2学年次生の実行委員会を中心となって企画し、学生たちが一致団結して運営しているものです。これを機に、これから本格的に始まる看護学の勉学に一層力を注ぎ、高度な知識・技術を兼ね備えた心豊かな看護職者へと育ててほしいものです。



誓いの言葉

平成25年度医大祭 “Next Innovation”

平成25年度の医大祭のテーマは「Next Innovation」（次なる改革）です。医大祭も今回で節目となる40回を数え、来年度には新病院も開院するというこの時機にマッチしたテーマです。平成25年11月2日（土）、3日（日、祝）に行われる主なイベントは次の通りです

【主なイベント紹介】

★2日間開催イベント

- ・模擬病院
- ・看護体験コーナー
- ・模擬店（アルコールの販売、持込禁止）
- ・病院ロビーイベント
- ・学生イベント

11月2日（土）

- ・お笑いライブ

11月3日（日・祝）

- ・リサイクルマーケット
- ・スタンプラリー
- ・ジャンピングバルーン
- ・献血・骨髄バンク啓蒙



医学部学外体験実習

近隣の病院等にご協力頂き、医学部学生が学外体験実習を行いました。本院以外での実習は、学生にとって貴重な体験となったようです。実習を終えた学生の感想文をご覧ください。

実際の介護現場での体験を通して

実習施設：医療法人財団愛泉会老人保健施設 愛泉会
4学年次生 市川 博子

愛泉会では、施設のご利用者をゲストと呼んでいます。また、愛泉会のモットーはキリスト教精神であり、スタッフの方は高齢者を敬い、愛を持って仕えています。

ゲストの方に何かしてあげるのではなく、スタッフが仕えているというこの心構えが基盤となっている愛泉会は、ゲスト一人ひとりのことをよく考えていて、そして思いやりを持って接している、とても良い施設でした。この施設をつくりあげた川原さんともお会いして、お話を聞かせて頂く貴重な体験もさせてもらいました。川原さんの信念を持ってされた活動に手を貸す方が沢山いて、お金も無かったけど人々の協力のおかげでできた施設と聞いて、川原さんのような心で人を動かせる人は本当に素晴らしい方だと感じました。

それから、私が今回の実習で一番強く思ったことは、観察力を養わなくてはいけないということです。二日目の配膳の時間に、ご飯をゲストの方に配っていたとき、担当のスタッフの方に呼ばれてこう言われました。「あの〇〇さんという方は見ればわかるでしょ、身体の右側が麻痺しているの。左手だけでバナナの皮がむけると思う？」

私ははっとしました。その方は配膳の前の時間に一緒にオセロをしたりお話をしたりしてコミュニケーションを取っていた方だったのに、右側の身体が動かないということには気付いていませんでした。確かに右手はギプスで固定していたのですが、話を頑張っただけではという気持ちでいっぱい、ゲストの方の観察が全くできていなかった自分に気付きました。

医師に重ねて考えると、患者さんを診察するとき、患者さんとお話をする中で患者さんの言葉だけではなく、しぐさ、雰囲気、話し方、動き方など様々な視点から患者さんを診ることが大切です。ここで、一つのことにとらわれて全体が見えなくなっているのは患者さんの病を治すことはもちろん、患者さんを診ることができません。また、患者さんの立場に立って一歩二歩先のことを考えたなら何をしてほしいのかわかるはずということも教わり、このことに気付かされたのは本当に良かったと思いました。

観察力というものは、日常的に養っていかないと身に付かないので、残りの学生生活のうちに人を観察する力を身に付けるように努力していきたいと思いました。

また、愛泉会で行われている玉コロピクチャーは一見レクリエーションのように見えるのですが、指先を使ったリハビリになり、人に頼られることで得られる満足感を感じられ、そして動作をみることでゲストの方の認知機能や身体機能がどのくらいかを測れる、という意義があることを教えて頂きました。愛泉会で行われている一つひとつのことに意味があり、ゲストのことを考えたプログラムになっていて、チームというものを感じました。

病院では医師、看護師、薬剤師など様々な職種の方でいて、病院から退院したら理学療法の方や音楽療法の方や詩吟の先生、習字の先生など更に沢山の職種の方でチーム医療を行っている、そんなところも実感することができました。将来、医師として働くときに、自分がそのチームの一員であること、様々な人が関わっての医療であることを忘れず同じチームの方を敬い協力しながら患者さんを診ていきたいと思いました。

最後に、3日間お世話になったお礼として、「手のひらを太陽に」の歌と踊りを贈りました。ゲストの皆さんは、手拍子したり一緒に歌ったり踊ったり、中には「頑張れ。」と応援して下さる方もいました。5人で楽しく歌って踊って、感謝の気持ちを伝えられたので、こういう場をもらえて本当に良かったです。また、あるスタッフの方からその優しい雰囲気のままお医者さんになってくださいと、私たちのグループは言われました。医師の道を目指す中でこれからいろんな人と出会い、良いこともそして悪いこともたくさん経験すると思います。どんなに辛く苦しいことがあっても、たとえ医師として立場が偉くなったとしても、優しい気持ちや思いやる気持ちを忘れないことが人として大切だと今回の実習で改めて感じました。

今回の学外実習も、大学の授業では体験できないことを沢山させてもらえて、これから医師を目指す中でこの体験を活かしていきたいと思いました。愛泉会のスタッフの方ゲストの方、いろんなことを教えてくださりそして暖かく接して下さり、本当にありがとうございました。

コンケン大学医学部短期留学体験記

本学では、コンケン大学（KKU）医学部と平成23年度に学術国際交流協定を締結して以降、教育と研究における国際交流の促進を目指し、積極的に学生等の交流を行っており、プログラムの一環として、臨床実習選択（elective）コースへ本学医学部学生を派遣しています

平成25年度のプログラムとして、平成25年7月27日（土）から8月11日（日）又は25日（日）まで計4名の学生が留学しました。この留学を終えた学生から寄せられた体験記をご紹介します。

「KKU臨床実習選択コース」への派遣者

医学部5学年次生 阿久津彬子

私はコンケン大学医学部の耳鼻科で2週間実習をさせて頂きました。内容は、回診、カンファレンス、オペ、外来の見学、病棟実習などです。驚いたのは、タイの医学生熱心さです。彼らは土日も休まず、朝早くから、夜遅くまで病院や大学で勉強します。そんな彼らの真剣な姿勢には大いに刺激を受けました。また、タイでは様々な処置を医学生も行うことができます。その充実した実習環境も魅力の一つであると思います。今回の留学は、私にとって大変貴重な経験となりました。多くの方々のご厚意に感謝しています。ありがとうございました。



阿久津さん（前から2列目一番右）

医学部5学年次生 古岡 秀人

私は今年度留学生として、夏休みを利用してコンケン大学医学部で実習させて頂きました。2週間という短い期間でしたが、多くのことを学ぶことができました。最初は慣れない食事、言語、環境に少なからず苦戦させられました。しかし、コンケン大学の先生、スタッフ、学生や多くの人に助けられ、日本と世界の医療の違い（特に、学生の学ぶ姿勢や医療における環境）について多くのことを学び、考えさせられる良い経験になったと思います。



古岡さん（右）

医学部5学年次生 渡邊 祥平

私は、コンケン大学医学部で2週間留学させて頂きました。留学は私にとって初めての体験であり、行く前は不安と緊張でいっぱいでした。しかし、2週間はあっという間に過ぎ、日本へ帰国する頃にはもっとコンケン大学にいたいと思うほど、とても楽しく充実した日々でした。今回お世話になったすべての関係者の方々にこの場をお借りして心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。



渡邊さん（左）

医学部5学年次生 岸野 孝昭

私は、この夏休みにタイのコンケン大学医学部で4週間臨床実習をしてきました。私が選択した内科では、現地の学生と一緒に病棟で入院患者の診断・治療を行いました。タイでは、例えば、感染症が疑われる患者であれば、学生が自ら喀痰や便のグラム染色を行った上で抗菌薬を選択し、それを医師が承認するというように、非常に実践的な実習をしており、とても良い刺激を受けました。このような貴重な機会を与えて頂いたことに大変感謝しています。



岸野さん（一番右）

交通安全講習会開催

平成25年10月21日（月）午後5時から大学本館301講義室において、名東警察署交通課の落合修氏を講師に迎え、医学部・看護学部の学生を対象とした交通安全講習会を実施し、72名の参加がありました。

講師からは、交差点での事故が非常に多く、昨年度の死亡事故の半数以上が交差点で起きており、交差点は危険地帯と認識してほしいこと、また、飲酒運転に対する罰則や行政処分などについての話がありました。

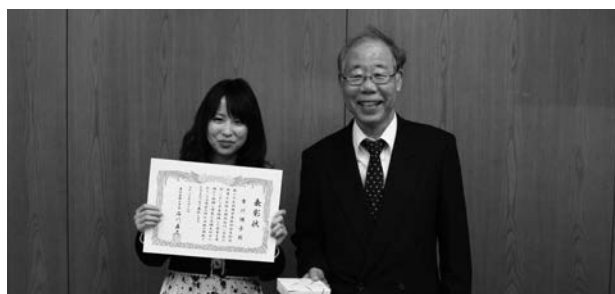
引き続き、「どう防ぐ交差点事故／事故現場に学ぶ」と題したDVDを鑑賞し、交差点はいかに危険か、また、自分が違反をしていなくても、事故に遭うことがあることを実感させられました。

年に2回、春と秋に実施している交通安全講習会を通じて、交通安全に対する意識を常に高く保ち、受講した学生一人ひとりが交通安全に努めてくれることを期待します。

第65回西日本医科学生総合体育大会において健闘

平成25年8月1日（木）から8月18日（日）にかけて、九州大学医学部を主幹校として開催された第65回西日本医科学生総合体育大会において、本学医学部4学年次生の市川博子さんが陸上競技部門において、女子800m競争、女子1500m競争において優勝するという優秀な成績を収めました。今回の他の学生の模範となるこの成績を評価し、平成25年10月17日（木）に、石川直久学長から表彰状と記念品が贈呈されました。

今後も、文武両面で、表彰される学生が続くことを期待します。



第65回西日本医科大学生総合体育大会（平成25年8月1日～8月18日）

競技名	種目	成績	氏名又は団体名
陸上競技	個人 女子 800m	優勝	市川 博子
	個人 女子1,500m	優勝	

医学部学生

第17回臨床解剖研究会において学会発表

本学では、『医学生の学会発表に係る旅費の支給制度』を設け、学生の研究活動を支援しています。これは、本学医学部生が日本解剖学会、臨床解剖研究会、日本脈管学会において最優秀賞を連続受賞したことが契機となり、研究に対する意識が高まったことを受けて設けられた制度です。

去る平成25年8月23日（金）・24日（土）に、鹿児島市の城山観光ホテルで行われた第17回臨床解剖研究会において、本学医学部4学年次生の有馬隆紘さんが「半月膝蓋靭帯に関する機能解剖学的研究第4報－形態的な多様性と機能に注目して－」と題して口演発表を行いました。

本研究会は、人体の構造と機能に関する解剖学的研究成果を臨床応用し、外科的手技の開発や画像診断の精度向上を目的とするものであり、多くの解剖学者及び臨床医が集う年1回の研究集会です。本学医学部生は毎年、解剖学的研究成果を発表しているため、すっかり常連になっています。今回の有馬さんの発表は、解剖学の成書には記載されていない半月膝蓋靭帯について、数十例に及ぶ解剖所見を纏めたものであり、発表後の討論時間において活発な質疑応答が行われました。

有馬さんからは、「2学年次から続けさせて頂いて、解剖実習後の1回だけの学会発表に終わらず、研究を継続することの重要性和、学会に参加することの意義を知ることができました。このような普段の学生生活ではなかなか得られない経験をさせて頂き、解剖学講座教授で



右から
 光嶋 勲先生（東京大学教授）
 中野 隆先生（愛知医科大学教授）
 佐藤達夫先生（臨床解剖研究会会長、東京有明医療大学学長、東京医科歯科大学名誉教授）
 有馬さん（愛知医科大学医学部4学年次生）
 大谷 修先生（東京医科大学客員教授）
 林 省吾先生（東京医科大学講師）

ある中野隆先生を始め、多大なるご協力を頂いた西由紀先生等の解剖学講座の先生方には感謝の気持ちで一杯です。」という感想が寄せられています。

（文責：解剖学講座：中野隆教授）

新病院への移行・引っ越しの日程

平成26年5月の新病院開院に向けて、工事も順調に進み、新病院への移行・引越し日等が以下のとおり決まりました。

引越し期間	：平成26年4月30日～5月8日
外来休診日	：平成26年4月30日・5月1日・2日・7日・8日
I C U系患者移送日	：平成26年4月30日
入院患者移送日	：平成26年5月1日
外来開始・開院日	：平成26年5月9日

現在、開院に向けた移行・引越しの検討、運用の検討、医療機器・家具什器等の整備を進めています。

新病院への移行・引越しについては、新病院移行WGの下に運用調整TF、患者移送TF、物品移転TFに分けて基本的な方針やスケジュール・患者搬送動線、物品移転等の運用の検討を行っています。

外来、病棟の運用については、外来運用・移行統括WG、病棟運用・移行統括WGを設置して、その下に外来では17ユニット、病棟では23ユニットを編成しました。外来、病棟ともに代表ユニットによる運用モデル（プロトタイプ）を作成し、各ユニットの特性に応じて個々の検討を行うこととしています。また、中央診療部門等に

ついても、それぞれのWGや各部署で運用検討を行っています。

医療機器・家具什器等の整備については、予算を考慮しつつ、整備コンセプト「全体最適」に沿って進めています。医療機器整備では、CT、MRI、PET-CT等の重点整備機器や共同運用・共通仕様機器の調整は、ほぼ終了しており、残りは各科特有の機器の調整となっています。また、家具・什器等については、ヒアリングを実施して、現有の家具備品等に関する移設品の最終的な詰めを行い、新規で購入すべきものの最終確認等を行っています。



平成26年5月9日開院

愛知医科大学新病院建設へのご協力のお願い

日頃は本学の運営に多大なるご協力を頂き、誠にありがとうございます。

さて、既にご承知のこととは存じますが、本学は現在、新しい時代の流れにふさわしい新病院の建設を進めております。今秋の竣工に向けて工事は順調に進捗しており、この地のランドマークとして高くそびえるようになりました。この新病院建設は、本学開学以来最大の事業であり、高機能医療を効率的に提供し、多様化する医療ニーズにお応えできる地域の基幹病院として皆さまにも誇りに思っている病院を目指し、教職員一丸となって取り組んでおります。

厳しい経済情勢ではありますが、本事業の趣旨をご理解頂き、募金に対する格別のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

【募金要項】

1. 募金目的 愛知医科大学新病院建設資金
2. 募金目標額 20億円
3. 募金の期間 平成23年3月～平成28年3月
4. 募金1口の金額 10,000円

※できるだけ多数口のご協力をお願い申し上げます。

【寄附金に対する税制上の優遇措置について】

1. 個人の場合（所得税及び所得の寄附金による控除）
平成23年度税制改正により、新たに「税額控除制度」の適用を受けられるようになりました。ご寄附をされた方は、確定申告の際、「税額控除制度」と既存の「所得控除制度」のうち、いずれか一方の制度を選択し、税制上の優遇措置を受けることができます。

<税額控除制度>

寄附金額が2千円を超えた場合、その超えた金額の40%に相当する額を所得税から控除できます。

所得税率に関係なく所得税額から直接控除されるため、多くの方において、既存の所得控除と比較して減税効果が大きくなります。

$$\left(\text{寄附金額} \times 1 - 2 \text{千円} \right) \times 40\% = \text{所得税控除額} \times 2$$

※1 年間総所得金額等の40%が限度となります。

※2 所得税額の25%が限度となります。

(例) 年収1000万円の寄附者が10万円寄附した場合

$$\left(10 \text{万円} - 2 \text{千円} \right) \times 40\% = 39,200 \text{円}$$



学校法人愛知医科大学
理事長 三宅養三

<所得控除制度>

寄附金額が2千円を超えた場合、その超えた金額が課税所得から控除され、所得税が減税されます。

$$\left(\text{所得金額 (年収)} - \left[\begin{array}{l} \text{諸控除} \\ \text{寄附金} \times 1 - 2 \text{千円} \end{array} \right] \right) \times \text{所得税率} = \left[\begin{array}{l} \text{所得税額} \\ \text{控除額} \end{array} \right]$$

※1 年間総所得金額等の40%が限度となります。

(例) 年収1000万円の寄附者が10万円寄附した場合

$$\left(10 \text{万円} - 2 \text{千円} \right) \times 23\% \times 1 = 22,540 \text{円}$$

※1 平均的な世帯の諸控除額（基礎控除、社会保険料控除、扶養控除等）を想定した所得税率

2. 法人・団体の場合（受配者指定寄付金）

法人・団体の寄附金は、法人税法第37条第3項第2号に基づき寄附金額全額が当該事業年度の損金に算入できます。

免税手続きには日本私立学校振興・共済事業団の「寄付金受領書」が必要となりますが、これに関する事業団への諸手続きは、本学が行います。

【問合せ先】

資料請求等募金に関するお問い合わせは、以下の部署
をお願いします。

〒480-1195 愛知県長久手市岩作雁又1番地1

学校法人愛知医科大学 法人本部 資金・出納室

Tel：0561-63-1062（直通）

Fax：0561-62-4866

E-mail：sikin@aichi-med-u.ac.jp

認知症疾患医療センターに指定

本院は、平成25年9月1日付けで愛知県から、「認知症疾患医療センター」の指定を受けました。

認知症疾患医療センターとは、医療機関や介護保険関係機関、行政等との連携を図り、認知症の患者さんとその家族が、住み慣れた地域で安心して生活ができるよう支援をする機関の一つです。

主な業務は、外来診療、専門医療相談、認知症疾患の鑑別診断とそれに基づく初期対応、周辺症状・身体合併症への急性期対応、かかりつけ医や医療・介護従事者等を対象とした研修会の開催、認知症疾患医療連携協議会

の開催、認知症に関する情報の収集及び発信となっています。

特に、認知症の診療においては、かかりつけ医との連携が重要であり、共に診療を行うことで診療報酬の算定が可能となっています。

本院での診療は、精神神経科と神経内科が行い、患者さんの病状に応じて診療科を振り分けます。この診療予約のコーディネートは、医療福祉相談室で行います。医療福祉相談室は、相談窓口として、また地域との連携をより円滑に行うために努力してまいります。

広域医療搬送訓練に参加

政府・内閣府主催の平成25年度広域医療搬送訓練が、平成25年8月31日(土)に愛知県を中心に開催され、愛知県基幹災害拠点病院である本院も積極的に参加しました。

この訓練は、大規模災害時における都道府県域を超えた医療救護を目的とし、毎年全国で実施されているものです。

今年度の訓練は、南海トラフ巨大地震により、愛知県・三重県・和歌山県沖の太平洋上でM9クラスの地震が発生し、三県を中心に沿岸部が津波により甚大な被害を受けたとの想定で、被災地に対応しきれない傷病者を、医療機関から域内搬送拠点を經由して、域外の医療機関への搬送を行う実働訓練として展開されました。本院では、DMAT(災害派遣医療チーム)を中心に活動し、次の任務にあたりました。

- ①愛知県庁における災害医療調整本部の運営
- ②県営名古屋空港におけるSCU(広域医療搬送拠点)の統括指揮
- ③瀬戸保健所における地域医療対策会議への参加
- ④本院内に設置されたDMAT活動拠点本部の運営
- ⑤本院での災害時対応訓練及び広域医療搬送対象傷病者の選定及び搬送



搬送訓練の様子



トリアージの様子

医療安全講演会開催

平成25年9月12日(木)午後5時30分から、大学本館たちばなホールにおいて、30回目となる医療安全講演会が開催されました。

今回は、講師に静岡県磐田市立総合病院5S事務局の伊藤隆氏をお迎えして、5S運動(5Sとは「整理・整頓・清掃・清潔・しつけ」の頭文字)の実際について講演して頂きました。新病院への移行・引越を間近に控えた本院にとってはタイムリーな企画であり、参加した職員は熱心に聞き入っていました。

5S運動の本格稼働には、病院全体の意思統一が不可

欠であり、何よりも病院トップの決断が重要との講師のお話には、5S運動を軌道に乗せた第一人者としての気概と気迫が感じられました。

当日受講できなかった職員については、講演の模様を録画したDVD上映会を開催(10/25, 30, 31)し、その後貸出しを行っておりますので、医療安全管理室(内線:2009)までお問い合わせください。

医療安全管理室では、全ての職員に医療安全の意識高揚が図れるよう、今後もより実践的な研修会を開催していく予定です。

臨床研修指導医のための教育ワークショップ開催

平成25年9月21日（土）・22日（日）に東京第一ホテル錦で、臨床研修指導医のための教育ワークショップ（WS）が開催されました。

厚生労働省の監督の下、この趣旨にそって今回で9回目となるWSは、院内から16名、蒲郡市民病院、名古屋掖済会病院、名古屋医療センター、久美愛厚生病院、総合大雄会病院から6名の合計22名が参加しました。

野浪敏明病院長及び春日井邦夫卒後臨床研修センター長を始め、池田洋教授（病理学講座）を中心とした運営陣に加え、学外からも伴信太郎教授（名古屋大学大学院医学系研究科総合診療医学）、松井俊和教授（藤田保健衛生大学医学教育企画室長）をタスクフォースとしてお迎えし、2日間にわたりグループ作業を中心としたワークショップが行われました。

また、厚生労働省東海北陸厚生局からお招きした川尻宏昭臨床研修審査専門官による特別講演、(株)エスアールエル営業人材開発チームの浅田均主任研究員によるコミ



出席者による記念撮影

ュニケーションスキル研修も行われました。

受講者からは、「研修医を含め指導する時の意識の置き方を再認識した。」「指導医としてのスキルアップへつながった。」など活発な意見がありました。

このワークショップを受講された指導医の方々を核に、更なる臨床研修の充実が期待されています。

厚生労働省・瀬戸保健所による立入検査

毎年行われる厚生労働省・瀬戸保健所の立入検査が、今年は平成25年10月11日（金）に実施されました。

午前中は、特定機能病院としての医療法関係規定等に基づく管理・運営状況、安全管理全般に関する実施計画、実施状況を中心に書類審査と各所属担当者との質疑応答が行われました。午後からは、厚生労働省東海北陸厚生局の医療監視員と愛知県医務国保課職員及び瀬戸保健所の各部門担当調査員が、病棟や中央放射線部、薬剤部、臨床工学部等の視察と実地指導が行われました。

視察及び実地指導終了後、厚生労働省東海北陸厚生局

医療指導監視監査官と瀬戸保健所長から今回の立入検査の講評が行われ、「概ね良好な運営状況であった。引き続き職員の健康診断の受診率向上及び医療安全・感染予防対策研修の受講促進に努めてほしい。」との要請がありました。

この講評の後、野浪敏明病院長から今回の指摘事項について、「今後一層努力し、指摘事項について早急に改善していきたい。」と抱負を述べ、今年度の立入検査は終了しました。

保険診療に関する講演会開催

臨床研修病院においては、全職員を対象とした保険診療に関する講習が年2回以上実施されていることが必須とされているため、平成25年10月29日（火）午後5時30分から大学本館たちばなホールにおいて、(株)メディセオ中部支社統括管理部市川喜誉氏を講師としてお招きし、「特定共同指導について」と題した保険診療に関する講演会が開催されました。

講演会では、初めに野浪敏明病院長から、平成11年に本院において実施された特定共同指導について、多数の指摘事項と多額の返還金が生じたことを含めて挨拶がありました。

講演内容は、①保険診療制度の基本、②DPC/PDPS

制度の基本、③指導と監査の概要、④特定共同指導の概要、⑤特定共同指導の事例、⑥改善指摘事項の事例の順で行われました。特に、⑤特定共同指導に関する事例では、他病院における実際の特定共同指導の内容、返還金などの生々しいデータが示されました。

保険請求の基本はカルテ記載であることと、特定共同指導は病院にとって人的労力と経済的負担を課せられることを認識させられました。

講演会は医師、看護師、コメディカル等の幅広い職種から247名の参加があり、特定共同指導に対する関心の高さを感ずる講演会でした。

高校生の一日看護体験研修実施

平成25年8月7日（水）に、愛知県内の県立長久手高校・県立東郷高校・名古屋市立名東高校・私立栄徳高校の4校から21名の高校生の参加により、一日看護体験研修が行われました。

研修に先立って、小池三奈美看護部長から挨拶があり、「一日看護師」としての辞令交付を受けた後、ナース服に着替え各病棟にて看護業務の一部を体験しました。

始めは、緊張した面持ちで、患者さんと話をすることができないようでしたが、時間が経過するうちに和やかに会話している様子が伺え、車椅子を引いたり、食事の介助をしていく中で少しずつ慣れ、笑顔が見られるようになりました。

午後からのドクターヘリの見学では、間近で見るとコプターに興味をもち、写真撮影などをしていました。

研修終了後に行ったアンケート調査において、「やりがいのある仕事」、「看護師さんの大変さがわかった。」、「体力と機転が必要」、「将来看護師を目指したい。」、「患者さんから感謝された。」、「愛知医大病院で働きたい。」



参加学生による記念撮影

などの意見があり、高校生にとっては新鮮で貴重な体験を通して、命の尊さを学ぶことができ、大変有意義で充実した研修となったようでした。

参加した高校生が今回の体験を通して、「看護」のすばらしさを理解し、将来は看護師を目指してくれることを願っております。

メディカルクリニックからのご案内

形成外科外来を開始

平成25年10月から、メディカルクリニックにおいて形成外科外来を開始することとなりました。

形成外科は、主として皮膚などの軟部組織を扱うため、先天性の外表奇形やアザ、外傷、癌などを切除した後の修復など、体表面に関することを対象とします。また、より綺麗に美しくするという美容的な配慮も重要です。したがって、美容外科も形成外科の大切な分野となります。

メディカルクリニックでは、簡単な外来手術（母斑、皮膚・皮下腫瘍等）、熱傷や外傷の治療、本院形成外科

や他病院で実施した手術のアフターフォローなどを行っていく予定です。また、メディカルクリニックでは扱えない疾患、症状の場合には、本院形成外科において対応させていただきます。

担当医は次のとおりです。

医師名	診察日
竹市夢二准教授	毎月第4週木曜日午前
平松幸恭助教	毎月第2週木曜日午後

平成25年度第1回ハラスメント防止講演会開催

ハラスメント防止の啓発活動として、平成25年8月1日（木）午後5時30分から本院C病棟202講義室において、ハラスメント防止講演会が開催されました。

今回は、全職員を対象とした“自由参加方式”とし、できるだけ多くの参加を呼びかけました。その結果、参加者総数は59名となり、前回（昨年12月）比23%増と若干ではありますが増加しました。

講演会の冒頭、ハラスメント防止委員会委員長の佐賀信介医学部長から、最近目立っているハラスメントやいじめの報道を対岸の火事と思わず、その防止に努めると同時に、発生した場合においては被害者本位の救済はもとより、ハラスメントの防止に向けて、より良い職場環境作りに努めていきたいとの挨拶がありました。

講師には、前回と同じく岩月律子氏（21世紀職業財団）をお招きし、「パワーハラスメントにならない指導とは」のテキストに沿って、日本全国の大学で近年発生しているアカデミックハラスメントの具体的な事例等も織り交ぜながら、分かりやすくご講演頂きました。



講演後のアンケート結果では、「大変良かった（17%）」と「良かった（66%）」とを合わせて、参加者の83%から好評を頂きました。

こうした講演会は、年2回定例開催しており、次回は「人権週間」の12月に開催予定です。

第25回日本医師会認定産業医研修会開催

産業保健科学センター長 小林 章雄

平成25年9月14日（土）に、大学本館たちばなホールにおいて、第25回日本医師会認定産業医研修会を開催し、98名の先生方にご参加頂きました。

今回は、「現場の産業医活動を支える包括的知識」をテーマに、産業医あるいは労働衛生コンサルタントとして豊富な実務経験と幅広い知識をお持ちの先生方を講師にお招きしました。

五藤雅博先生（五藤労働衛生コンサルタント事務所）には、「産業医として有害業務をどう考えるか」について、有害業務の3管理、作業環境管理、作業管理、健康管理の基本的な考え方とその実際を詳しくお話し頂きました。

上原正道先生（ブラザー工業産業医）には、「職場の健康管理と就業措置」について、産業医として留意すべき就業上の措置と日頃の活動について実践的なお話をさせて頂きました。

労働衛生コンサルタントの菊池幸一先生と石田修先生には、「作業管理・作業環境管理における事例検討」として、様々な対策事例をご紹介頂き、その留意点を解説頂きました。

近年、本講習会への参加者が増加傾向にあり、更に充実した内容となるよう検討を重ねていく予定です。

新病院開院に向け、接遇研修を実施

新病院の開院に向けたサービス向上への取組として、平成25年9月25日（水）から27日（金）の3日間にわたり接遇研修を実施し、計853名の職員が受講しました。今回の研修は、接遇の“How to”を教え込むものではなく、「あなたの接遇は何点でしょうか?」、「なぜ笑顔は大切なのでしょう?」といった質問を講師が投げかけることで、自ら「接遇の本質を考える」研修を実施しました。受講者の85.4%から、「大変役立つ」、「役立つ」との回答を頂き、職場での接遇意識向上が期待されています。

今後も継続的に、新病院のコンセプトである「元気ホスピタル」の実現に向けた人材育成に取り組んでいく予定です。

受講者からの感想

- ・「接遇は医療安全」と言った講師の言葉、まさにその通りと思いました。（医療職員）
- ・患者さんとの距離感を保つことや笑顔での対応がとても大切であると思った。（看護職員）
- ・ノンバーバルコミュニケーション（距離感、うなずき、相槌、笑顔）の大切さがわかりました。（事務職員）
- ・医療人はサービス業という言葉に共感できました。本当にその通りだと思います。気分よく時間を過ごせるように努めたいと思います。（看護職員）
- ・マインドがあってこそ。笑顔を絶やさないためには自分の心と体が元気でなくてはいけない。（看護職員）
- ・クレームにならない対応は接遇からという言葉は以前上司から聞いたことがあり、その通りだと実感しています。（看護職員）
- ・普段患者さんとは接していないので、スタッフ間で接遇を意識していきたいと思いました。（医療職員）
- ・医療関係者同士のコミュニケーションにも必要なことだと思います。（事務職員）
- ・自分を見つめ直し、知ることができた。いい病院にしていきたいと思った。（看護職員）
- ・新病院に向けて一層患者さま、病院関係者の期待度が上がっていることを意識して取り組みたい。（看護職員）



図書館連携による健康支援事業(めりーらいん) 「みんなで食育 早寝早起き朝ごはん」講座を開催

平成25年10月6日(日)に日進市立図書館において、図書館連携による健康支援事業(めりーらいん)による講座を開催しました。これは、同図書館の新館開館5周年記念事業の一環として企画したもので、小学生とその保護者12組28名が参加しました。

当日は、今回のテーマである「食」について楽しく学べるよう、90分間に四つのプログラムを盛り込みました。まず、書名から食べ物の名前を見つけ出し、それを模擬スーパーで購入する“謎解き暗号ゲーム”と、購入した食べ物を食事バランスガイドに当てはめる“クイズ”では、親子で力を合わせる姿が印象的でした。

次いで、看護学部感染看護学の仲井美由紀准教授から、朝食の大切さや命を頂くことの尊さが伝えられました。

最後に、同図書館ボランティアスタッフによる“読み聞かせ”でも、食をテーマとする絵本を取り上げました。

今回の子どもを対象とした企画やボランティアとの協



講義の様子

働は初の試みでしたが、めりーらいんでは、今後も地域の皆さまの健康支援につながるよう様々な視点でイベントを企画したいと考えておりますので、ご支援くださるようお願いいたします。

医学情報センター(図書館)

学習環境の整備を実施

医学情報センター(図書館)では、学生から要望のあった個人学習ブース40台を5階南側に整備しました。設置場所は、昨年度実施した図書等の除籍・廃棄に伴う館内の再整備で、書架等を移設・撤去することで確保したところです。

今回新設した学習ブースは、利用者の皆さんがより集中して学習等ができるよう、1台ごとに半透明のパーティションで仕切られており、また、個別照明とパソコン用コンセントも完備された非常に利用しやすい仕様となっています。

また、本センターでは、既に施工済みの書架の「床固



定工事」と「天つなぎ工事」に加え、新たに落下防止装置「ブックキーパー」を整備しました。この装置は、書棚の約5cm上に、棚と並行して落下防止バーを取り付けることにより、地震の揺れによる図書等の落下を防止する仕組みです。さきの東日本大震災の被災図書館では、落下した図書等が通路に幾重にも重なり、避難経路の確保が大幅に遅れた館があったとの報告があり、また一方では、同装置の設置館ではかなりの効果も実証されています。図書等を取り出す時の手間は若干あるものの、落下図書による受傷の低減と避難経路確保のため、利用者の皆さまのご理解とご協力をお願いします。

＝ 地域連携 ＝

長久手市・(株)長久手温泉との連携による 「第2回よくばり健康づくり・長久手スタイル～ロコモタ予防～」開催

平成25年10月27日（日）に長久手市，(株)長久手温泉ござらっせ，愛知医科大学の提携事業として健康増進イベント「第2回よくばり健康づくり・長久手スタイル～ロコモタ予防～」が開催されました。

当日は，一般市民21名にご参加頂き，まず，本学運動療育センターにおいて，牛田享宏センター長による「痛みとロコモタ予防について」の講義を受講しました。続いて，温水プールにて健康運動指導士によるメタボ解消の水中トレーニングを行った後，食生活の改善について山口節子管理栄養士のお話を伺いました。



牛田享宏運動療育センター長による講義

その後，会場を長久手温泉ござらっせに移動し，運動療育センターと長久手温泉が共同開発した健康づくりヘルシーランチを頂きました。

最後は，参加者全員ゆったりと温泉に浸かり，楽しかった今日の思い出を振り返りました。

ご参加頂いた市民の方々からは，「本当に役立つお話しとトレーニングでした。」，「機会があれば次回もぜひ参加したい。」との感想を頂きました。

本学では，今後も市民の健康づくりに役立つイベントを企画して行く予定です。



温水プールでのメタボ解消運動

第57回日本災害看護学会第15回年次大会にて 看護学部 臼井千津教授 「功労賞」受賞

本学看護学部の臼井千津教授【写真】が，平成25年8月22日（木）・23（金）に開催された「第57回日本災害看護学会第15回年次大会」において功労賞を受賞しました。

これは，臼井教授が長年にわたり災害看護学の発展に寄与されたものが評価されたものです。

表彰を受けられた臼井教授から，「日本災害看護学会第15回年次大会において学会の功労賞を頂きました。災害看護はまだまだ若輩の身であり，恐縮の至りです。私が，災害看護に関心を抱いた契機は，平成7年1月17日の阪神淡路大震災でした。以後，国内外で甚大な災害が発生するたびに被災地のニーズとケアの在り方検討のため，被災地を訪問させて頂いており，平成23年3月11日の東日本大震災以後も院生とともに，幾度か訪問し研鑽に励んでおりますことを報告致します。また，平成24年度には第14回年次大会を名古屋で開催させて頂き，開



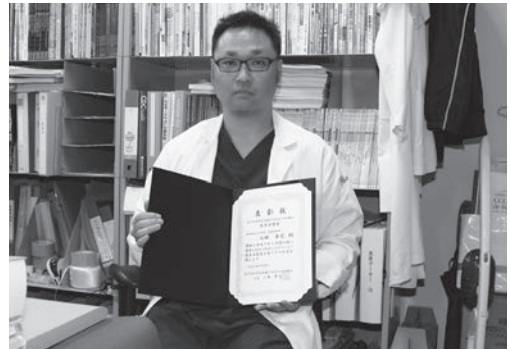
式には大村秀章県知事の御来賓を頂きました。関係者の皆さまの多大なるご支援に感謝を申し上げます。」と感想がありました。

第57回日本医真菌学会総会・学術集会にて 薬剤部 浜田幸宏室長「優秀演題賞」受賞

薬剤部の浜田幸宏室長（感染制御部兼務）【写真】が、平成25年9月28日（土）に開催された「第57回日本医真菌学会総会・学術集会」における演題発表で、「優秀演題賞」を受賞しました。

これは、浜田室長が演題発表した「ミカファンギンのPharmacokinetics-Pharmacodynamics解析」が、優れた内容かつ医真菌学の発展に大きく貢献するものとして評価されたものです。

表彰を受けられた浜田室長から、「このような名誉ある賞を拝受したことを大変光栄に思っております。この賞を励みに、今後も更なる研鑽を積んで参る所存です。研究に際しご指導頂きました三嶋廣繁教授，山岸由佳准教授，平井潤助教に深謝申し上げます。」と感想がありました。



第286回東海外科学会にて 卒後臨床研修センター 笹島裕史研修医「若手奨励賞」受賞

卒後臨床研修センターの笹島裕史研修医【写真】が、平成25年10月20日（日）に開催された「第286回東海外科学会」における演題発表で、「若手奨励賞」を受賞しました。

これは、笹島先生が発表した「B型大動脈解離後の偽腔-気管支瘻に対してTEVARを施行した1例」が、若手奨励賞（血管・胸部）部門において、優れた内容として評価されたものです。

表彰を受けられた笹島先生から、「今回、このような素晴らしい賞を受賞することができ、とても光栄に思います。血管外科の石橋宏之教授を始め、指導医で発表当日まで指導して下さいました血管外科の山田哲也先生には心から深く感謝致します。今後も、日々の研修に力を入れて頑張ります。」と感想がありました。



●（一財）愛知医科大学愛恵会 ● フラワーアレンジメントレッスンの開催

一般財団法人愛知医科大学愛恵会では、毎月1回、火曜日にフラワーアレンジメントレッスンを開催しています。レッスンの主催は、本院3階フラワーショップ「リアン」、開催場所は同3階の「喫茶ラ・シベール」です。

生花に特殊加工を施したプリザーブドフラワーは、生花と変わらぬ美しさを長期間保つことが出来るお花です。バラやカーネーション、アジサイからガーベラまで種類も色もとても豊富です。これらのお花を使って、毎月異なったいろいろなデザインのアレンジを制作しています。

プリザーブドフラワーは、茎がありませんから花や色をどのように組み合わせるか、また、どんな素材（リボンや器、オーナメントなど）と合わせて仕上げるかということが非常に重要です。講師の見本を参考にしながら、毎回皆さん楽しくレッスンを受講されています。

レッスン終了後は、美味しいお茶とお菓子で一休み。「ここがキレイにできた。」「ここが難しかった。」とお話



をされながら楽しい時間を過ごしていらっしゃいます。

平成25年11月26日（火）は、「クリスマスフレームアレンジ」、平成25年12月17日（火）には、「お正月アレンジ」を制作します。

皆さんも是非参加をしてみませんか。

組織内における能力開発研修会を実施

事務部門では、若手職員を対象とした研修を実施し、下半期に取り組む課題形成を行いました。

新規採用事務職員研修では、同期のメンバーが半年間どの様な思いで仕事に取り組んできたかを共有し、仕事上している工夫などを情報交換して、仲間の成長を確かめました。受講者からは、「同期で共有する目標も、半年前と比べて変化した。」「経験を共有する事で、お互いのレベルアップにつながる。」といった感想がありました。

また、主事（2年目から5年目程度）を対象とした、自立型人材育成研修フォローアップでは、マイナス思考を切り離し、ポジティブに仕事に取り組むことができる思考方法、コミュニケーション能力を中心に学習し、「5年後の自分のなりたい姿」を描きながら、今後の行動目標を立てました。各部署で中核を担っていく人材としての成長が期待されます。

実施日等	内 容
新規採用事務職員研修（半年フォロー） 実施日：平成25年9月20日（金） 参加者：平成25年度新規採用事務職員6名	(1) 半年間のふりかえり ①モチベーション曲線（感情面のふりかえり） ②KPT法（スキル、能力面のふりかえり） (2) 仕事の棚卸 (3) 半年後の自分に向けたメッセージ
自立型人材育成研修フォローアップ 実施日：平成25年10月11日（金） 参加者：主事16名 講師：中根きみ絵（株式会社インソース）	(1) 前回の復習と上半期のふりかえり (2) アサーティブコミュニケーション (3) 重要度・緊急度のマトリクス (4) リフレーミングによるポジティブシンキング



学 術 振 興

学 位 授 与

◆大学院医学研究科



折本 有貴

学位授与番号 甲第411号

学位授与年月日 平成25年 8月22日

論文題目：「The prognosis of patients on hemodialysis with foot lesions (足病変を有する透析患者の予後について)」



山田 洋史

学位授与番号 甲第412号

学位授与年月日 平成25年 9月 5日

論文題目：「Infliximab counteracts tumor necrosis factor- α -enhanced induction of matrix metalloproteinases that degrade claudin and occludin in non-pigmented ciliary epithelium (TNF- α による、毛様体無色素上皮細胞のclaudin及びoccludinを分解するmatrix metalloproteinasesの発現増加をインフリキシマブが抑制する)」



Md. Ferdous Anower-E-Khuda

学位授与番号 甲第413号

学位授与年月日 平成25年 9月30日

論文題目：「Heparan Sulfate 6-O-Sulfotransferase Isoform-dependent Regulatory Effects of Heparin on the Activities of Various Proteases in Mast Cells and the Biosynthesis of 6-O-Sulfated Heparin (肥満細胞および6-O-硫酸化ヘパリンの生合成における種々のプロテアーゼ活性に対するヘパリンのヘパラン硫酸6-O-硫酸基転移酵素アイソフォーム依存性制御効果)」



北川 晃

学位授与番号 乙第355号

学位授与年月日 平成25年 8月22日

論文題目：「Ethanolamine oleate sclerotherapy combined with transarterial embolization using n-butyl cyanoacrylate for extracranial arteriovenous malformations (動静脈奇形に対するオレイン酸モノエタノールアミン (EO) による硬化療法とNBCAを用いた経動脈塞栓術の併用療法の検討)」



近藤 好博

学位授与番号 乙第356号

学位授与年月日 平成25年 9月 5日

論文題目：「Edema of the interarytenoid mucosa seen on endoscopy is related to endoscopic-positive esophagitis (EE) and is an independent predictor of EE (内視鏡で認められる披裂間粘膜の肥厚は内視鏡陽性食道炎に関連し、内視鏡陽性食道炎の独立因子となる)」



水谷建太郎

学位授与番号 乙第357号

学位授与年月日 平成25年 9月 5日

論文題目：「Comparison of the efficacy of ALA-PDT using an excimer-dye laser (630nm) and a metal-halide lamp (600 to 740 nm) for treatment of Bowen's disease (Bowen病の光線力学的療法におけるexcimer dye laser と metal halide lampの比較試験)」



上甲 眞宏

学位授与番号 乙第358号

学位授与年月日 平成25年10月10日

論文題目：「Different modifications of phosphorylated Smad3C and Smad3L through TGF- β after spinal cord injury in mice (マウス脊髄損傷後のTGF- β シグナルにおけるリン酸化Smad3Cとリン酸化Smad3Lの変容について)」



石田 政也

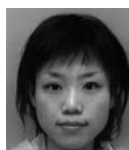
学位授与番号 乙第359号

学位授与年月日 平成25年10月10日

論文題目：「Efficient Penetration into Aqueous Humor by Administration of Oral and Topical Levofloxacin (レボフロキサシンの経口と点眼投与による眼房水への効率的な浸透)」

学位授与

◆大学院看護学研究科



吉田 裕香

学位授与番号 第56号

学位授与年月日 平成25年9月25日

論文題目：「精神症状を合併した患者をケアする看護師の体験－一般病棟看護師が抱いた感情に焦点を当てて－」

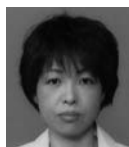


河原崎 純

学位授与番号 第59号

学位授与年月日 平成25年9月25日

論文題目：「クリティカルケア領域における低活動型せん妄発症に焦点を置いた文献研究」

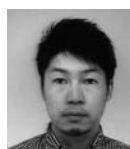


山本 陽子

学位授与番号 第57号

学位授与年月日 平成25年9月25日

論文題目：「ICUにおいて終末期へ移行する患者をケアする看護師の終末期ケアに対する認識と終末期看護実践に関連する要因」



藤井 直樹

学位授与番号 第60号

学位授与年月日 平成25年9月25日

論文題目：「急性期病棟における高頻度接触環境表面及び医療機器表面の汚染状況の細菌学的検討」

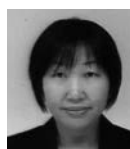


川野邊麻美

学位授与番号 第58号

学位授与年月日 平成25年9月25日

論文題目：「米国クリティカルケア看護師協会の提言する健全な職場環境に焦点を当てた文献研究」



宮武真生子

学位授与番号 第61号

学位授与年月日 平成25年9月25日

論文題目：「母親の力を支える親子教室における保健師の支援方法－幼児健康診査事後教室の参加者へのインタビューから－」

研究助成等採択者

○公益財団法人内藤記念科学振興財団 第45回（2013年度）内藤科学奨励金・研究助成

●氏名 佐藤元彦（生理学講座・教授）

研究題目 細胞・病態特異的細胞制御機構の解明：細胞・病態特異的G蛋白制御因子の同定と解析

助成金額 3,000,000円

○公益財団法人日東学術振興財団 第30回（平成25年度）海外派遣助成

●氏名 中山享之（輸血部・講師）

研究題目 ストレスによりインスリン抵抗性や血栓傾向は、どのように修飾されるか？ 脂肪組織における炎症細胞の機能に注目した解析結果。

助成金額 300,000円

○公益財団法人愛知県がん研究振興会 第38回（平成25年度）がんその他の悪性新生物研究助成

●氏名 笠井謙次（病理学講座・准教授）

研究題目 新規ヘッジホッグシグナル関連因子による乳癌幹細胞制御機構とその生体内機能の解明

助成金額 500,000円

○公益財団法人大幸財団 第30回（平成25年度）学会等開催助成

●氏名 柿崎裕彦（眼科学講座・教授（特任））

学会名称 第1回日本眼形成外科学会学術総会
助成金額 110,000円

●氏名 横尾和久（形成外科・教授）

学会名称 第25回眼瞼義眼床手術学会
助成金額 80,000円

○公益財団法人日東学術振興財団 第30回（平成25年度）研究助成

●氏名 山田陽一（歯科口腔外科・准教授）

研究題目 歯髄幹細胞を応用した骨再生医療実用化に向けたトランスレーショナルリサーチによる新規治療法開発

助成金額 700,000円

外国人研究員のご紹介

本学において研修するため、外国人研究員として来学された方をご紹介します。(敬称略)



アブドラ アル マムーン
Abdullah Al Mamun

国籍：バングラデシュ

現職：ラジシャヒ大学生化学分子生物学講座
座研究員

受入講座：生理学講座

研究期間：H25. 9. 1 ~ H26. 3. 31 (7か月)

研究課題：G蛋白活性調節因子の同定と解析

(アブドラさんからの一言)：It is pleasure to write something about Aichi Medical University (AMU). First of all I would like to express my gratitude and thanks to my supervisor Professor Motohiko Sato and AMU authorities for giving me an opportunity to do research here. I was very much pleased when I gave my first step and saw the beauty of the campus. There is a beautiful lake just in front of the campus and the back side of the campus is surrounded by small hill tracks with various types of trees, it is really mind blowing. May be this is not a large campus in aspect to others university campus in Japan but everything of this campus is well organized. As it is a Medical University, there are many experienced and highly qualified Professor, Associate Professor and a large group of efficient researcher. I think there are enough facilities here to do something new for the mankind through research. I am very much enthusiastic about my research work in Aichi Medical University.



アシシュ ギ ミレ
Ashish Ghimire

国籍：ネパール

現職：B.P.コイララ保健科学研究所
受入講座：麻酔科学講座

研究期間：H25. 9. 1 ~ H26. 11. 28 (3か月)

研究課題：日本における麻酔管理(薬剤の血中濃度シミュレーションによる投与, 呼吸循環管理, 気道管理法, 術後鎮痛など)を研修

(アシシュさんからの一言)：The Japanese Society of Anesthesiologists (JSA) has been trying hard to promote the expansion and improvement of anesthetic care all over the world and mainly in the developing countries. So, because of JSA, I am here in the most beautiful advanced Aichi Medical University (AMU). The department of anesthesiology at AMU is well established thanks to guidance of Professor Yoshihiro Fujiwara. The department is fully equipped with the instruments and devices. Although ultrasound has recently emerged within clinical practice, the routine use of technology among anesthesiologists continue to develop in both community and academic settings. I am here to gain knowledge in recent development of clinical anesthesia focusing on Ultrasound Guided Regional Anesthesia (USGRA). Along with me, many doctors from different hospitals from Japan undergo short term training in USGRA, which makes me feel lucky to be part of training. The explanation of procedures, skills in the operating rooms (OR), surgical intensive care unit (SICU) and in the pain clinic by professors during my training shows the enthusiasm towards teaching and learning activities of the department of Anesthesiology of AMU. The training for me is fruitful and I can contribute my knowledge to my work place. Departmental get together, visiting to different places and having Japanese cuisine with Japanese colleagues are always memorable. I am indebted to all the professors, colleagues and staffs of the department for their support to make homely environment for me. I wish AMU will be more advanced and popular throughout the world.

本学講座等の主催による学会等

【学会名】	【開催日】	【会長等】
・第154回日本耳鼻咽喉科学会東海地方部会講演会	9月8日(日)	植田 広海
・第24回愛知眼科フォーラム	9月8日(日)	岩城 正佳
・第20回日本門脈圧亢進症学会総会	9月19・20日(木・金)	野浪 敏明
・第133回東海産科婦人科学会	9月29日(日)	若槻 明彦
・第49回日本医学放射線学会秋季臨床大会	10月12・13・14日(土・日・月(祝))	石口 恒男
・第66回日本自律神経学会総会	10月24・25日(木・金)	岩瀬 敏
・平成25年度日本産業衛生学会東海地方会学会	10月26日(土)	柴田 英治
・第26階日本マイクロニューログラフィ学会	10月26日(土)	岩瀬 敏

日本耳鼻咽喉科学会 第154回東海地方部会連合講演会

平成25年9月8日(日)に、大学本館たちばなホールにおいて、日本耳鼻咽喉科学会第154回東海地方部会連合講演会が、本学耳鼻咽喉科学講座の主催で開催されました。

この会は、愛知県・岐阜県・三重県の6大学及び愛知県下の四つの主要な病院の持ち回りで年4回開催されております。特別講演などは行わず、3県の地方部会員に募集して集まった一般講演のみの学会であり、今回は本

学耳鼻咽喉科学講座からの3題を含めて26題の一般演題の発表がありました。

参加者は、東海3県の大学・病院の耳鼻咽喉科勤務医及び耳鼻咽喉科開業医211名で、活発な討論がなされ大変有意義な学会となり成功裏に終えることができました。

末筆になりましたが、本会の開催にあたり皆さま方の多大なるご支援、ご協力を賜りましたことを心より御礼申し上げます。

第24回愛知眼科フォーラム

愛知眼科フォーラムは、本学眼科学講座が主催し、一般眼科医に公開している眼科全般の学会であります。

毎年1回開催を慣行しており、本年度は第24回大会を迎え、平成25年9月8日(日)に名古屋市中区栄コーワビルにて開催されました。

当日は、本学医学部眼科学講座と関連病院から17題の一般演題の発表があり、いずれも高度な眼科医療、高い水準の研究を示すもので、活発な質疑応答もあって盛会でありました。

特別講演では、名古屋市立大学病院の吉田宗徳教授と岩手医科大学の黒坂大次郎教授の2名を招待演者としてお招きし、それぞれ「眼底蛍光、この頃の使い方」と「小児白内障の診断と治療」と題した講演が行われました。

参加者は最新眼科の診断法と治療法について多くの知識を深め、意義ある会とすることができました。なお、参加者は77名でした。

第20回日本門脈圧亢進症学会総会

第20回日本門脈圧亢進症学会総会が平成25年9月19日(木)・20日(金)の2日間にわたり、本学外科学講座(消化器外科)の野浪敏明教授を会長として名古屋国際会議場で開催されました。

本学会の前身は、昭和43年に門脈外科研究会として発足し、昭和53年に日本門脈圧亢進症研究会となり、昭和61年からは食道静脈瘤硬化療法研究会が併置されました。その後平成6年には、この二つの研究会が合併して今日の日本門脈圧亢進症学会が誕生しました。本学では、

昭和56年に当時の山本貞博教授が会長を務められました。

今回は、学会のテーマを『Artの追求』とし、教育セミナー、シンポジウム、パネルディスカッション、ワークショップ、ビデオワークショップ、要望演題、一般演題において多数の発表と活発な討議がありました。

本学会の開催に際しまして、ご援助、ご協力頂きました本学の皆さま並びに関連の方々に深く感謝申し上げます。

第133回東海産科婦人科学会学術講演会

平成25年9月29日（日）に、名古屋市の興和株式会社本店ビル11階ホールにおいて、第133回東海産科婦人科学会学術講演会が本学産婦人科学講座の若槻明彦教授を会長として開催されました。

本学会は、東海地区の6大学がそれぞれ担当となり、年2回開催されております。

学会は、一般演題のみで構成され、今回は44題の発表

があり、東海地区の大学病院、一般病院の産婦人科医及び開業医の先生方263人が集まり、活発な討論が繰り広げられ、大変有意義な学会となり成功裏に終えることができました。

末筆になりましたが、本会の開催にあたり皆さま方の多大なるご支援、ご協力を賜りましたことを心より御礼申し上げます。

第49回日本放射線学会秋季臨床大会

日本放射線学会秋季臨床大会は、国内の放射線医学会関連の学術集会のうち2番目に大きな学会です。今回は、本学放射線医学講座の石口恒男教授が大会長を務め、平成25年10月12日（土）から14日（月・祝）の3日間にわたり、名古屋国際会議場で開催されました。

今大会のテーマは「No Radiology, No Life～奏でよう放射線医学～」でした。放射線医学の恩恵で健康な生活があるということ、患者さんに元気になって頂くことで、放射線科医自身も元気に仕事をしたいという想い、

そして患者さんやご家族、スタッフ、社会とのコミュニケーションや連携の重要性を音楽のアンサンブルに例えました。

画像診断、IVR、放射線治療に関する教育講演31題、シンポジウム4題、パネルディスカッション2題、リフレクチャーコース8題、研修医セミナー4題、イメージインタープリテーション、特別講演と、一般演題181題の発表が行われ、2,600名以上の参加者を迎えて盛会に終えることができました。

第26回マイクロニューログラフィ学会

平成25年10月26日（土）に、本学本館303講義室において、第26回マイクロニューログラフィ学会が、第66回日本自律神経学会総会のサテライトミーティングとして開催されました。

全国から集まった一般演題が3題及び会長講演として、医学部生理学講座の岩瀬敏会長が「環境変化に対する自律神経応答のニューログラム解析」について講演しました。

また、特別講演として斯界の権威、岐阜医療科学大学

長の間野忠明先生に「日常生活をさせる筋交感神経活動」と題しまして、ご講演を頂きました。

本学会には、台湾からお招きした4名の研究者も出席され、マイクロニューログラフィのアジア地区への普及に貢献したと思われます。外国からのゲストがある学会の常として、半分は英語で行われましたが、活発な討論が英語で行われ、国際学会への第一歩を感じさせる学会となりました。

平成25年度日本産業衛生学会東海地方会学会

平成25年10月26日（土）に、大学本館たちばなホール及び講義室において、平成25年度日本産業衛生学会東海地方会学会が開催されました。

午前中は、講義室で一般口演が行われ、産業保健をめぐる研究交流が行われました。

午後からは、特別講演2題とミニシンポジウムを行いました。特別講演では、名古屋大学大学院環境労働衛生学教授に就任された加藤昌志先生から、ご自身のこれまでの労働衛生に関連する研究成果について、また、近畿

大学法学部教授の三柴丈典先生からはメンタルヘルス不調者をめぐる法の働きについて話がありました。ミニシンポジウムでは、次代を担う産業保健専門職をどう迎えるのかについて参加者を交えて討論を行いました。

午後の企画は日医認定産業医の単位が得られるもので、臨床医の先生方を含む約200名にご参加頂きました。開催にあたり、ご協力頂いた講師の先生方、参加者の皆さま、ご準備頂いた本学関係者に厚く御礼申し上げます。

第66回日本自律神経学会総会

平成25年10月24日（木）・25日（金）の2日間にわたり、ウイックあいちにおいて、第66回日本自律神経学会総会が開催されました。

同学会には、自律神経に関する学際的な知識と情報を広めることを目的として、全国から熱心な会員が集まりました。

特別講演として、岐阜医療科学大学学長の間野忠明先生に「日常生活を支える筋交感神経活動」、宇宙航空研究開発機構（JAXA）宇宙飛行士の向井千秋先生に「無重力状態における自律神経活動とスペースシャトル実験」についてお話し頂きました。

イブニングセミナーとしては、本学客員教授の高橋昭先生と加齢医科学研究所の吉田眞理教授に、また、12のシンポジウムのうち、睡眠科の塩見利明教授と薬理学講座の岡田尚志郎教授にオーガナイザーを務めて頂き、内科学講座（消化器内科）の米田政志教授と学際的痛みセンターの牛田享宏教授にトピックスの講演をお願いしました。

参加者は連日400名を数え、大変盛況でした。参加して頂いた学内の諸先生方を始め、多くの皆さま方に御礼申し上げます。

規 則

規則の制定・改廃情報をお知らせします。

「研究活動に係る外部資金の取扱いについて」の裁定

平成25年10月21日付けで「研究活動に係る外部資金の取扱いについて」が学長裁定され、本学における研究活動の振興を図るため、外部研究資金の獲得に係る本学の取扱いが整備されました。

学位規程の一部改正

愛知医科大学学位規程の一部が改正され、学位規則の改正により、学位を取得した者の学位論文全文をインターネット利用により公表することが義務付けられたことに伴い、これに対応するよう関係条文が整備されました。

施行日は平成25年9月17日

医学部医学教育強化推進委員会規程の制定

医学部における医学教育の将来計画や質的向上に係る計画等を審議していくため、愛知医科大学医学部医学教育強化推進委員会規程が制定され、同委員会の組織、任務等が定められました。

施行日は平成25年8月1日

医療サービス向上委員会規程の一部改正

愛知医科大学病院医療サービス向上委員会規程の一部が改正され、同委員会の委員構成が整備されました。

施行日は平成25年8月1日

メディカルクリニック規程の一部改正

愛知医科大学医学部附属メディカルクリニック規程の一部が改正され、診療科として、形成外科が新たに設置されました。

施行日は平成25年10月1日

安全衛生管理組織規程の一部改正

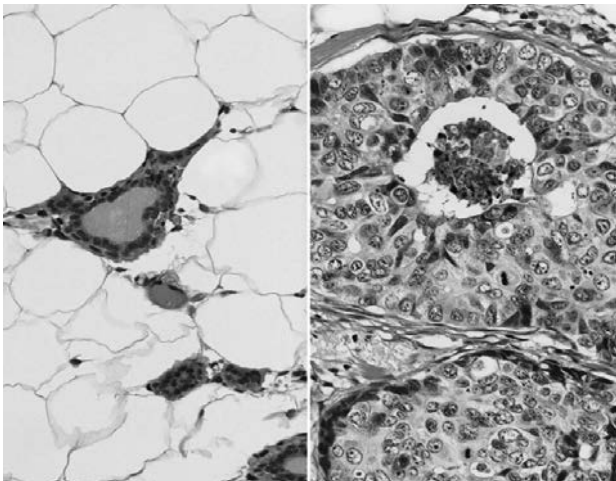
学校法人愛知医科大学安全衛生管理組織規程の一部が改正され、本学職員数の現状に合わせて、衛生管理者の人数、要件等が整備されました。

施行日は平成25年8月1日

病気と顕微鏡

よく一般の方から、「先生の専門は何ですか？」と問われ、「病理学です。」と答えても、すぐにご理解頂けないことが多いですが、そんな時、私たち病理医の仕事について、「検査や手術で採取された身体の一部を標本にして顕微鏡で診断する大事な役割を果たしています。」と分かりやすく答えるようにしています。

例えば、下図は、つい先日ある病院で乳がんが診断した症例の病理組織像ですが、右ががん組織で、左は周囲の正常乳腺組織です。左に見られるような細い乳管から、右のようながんが発生します。病理医は、このような組織像を顕微鏡で注意深く観察して、がんの性質、拡がり、浸潤、転移などについて診断し、治療法の選択、予後の推測などのための情報を提供しています。このように、医者の中で最も顕微鏡を駆使して仕事をしているのは病理医であると申せましょう。



正常乳腺組織

がん組織

そこで、医学や生物学が発展する過程で、顕微鏡がどのような役割を果たしてきたのか、その歴史について紐解いてみることにしました。顕微鏡を誰が発明したのかについては諸説があるようですが、対物レンズと接眼レンズの組合せによる顕微鏡は、1590年にオランダの眼鏡師ヤンセン父子（Hans & Zacharias Janssen）によって発明され、この複式顕微鏡が今日の顕微鏡の基本となっています。1661年に、イタリアのマルピーギ（Marcello Malpighi）は顕微鏡を使い、カエルの肺の毛細血管について記述していますが、組織学の領域では彼の名を冠した命名が今もいくつか使われています。1665年には、イギリスのフック（Robert Hooke）が、顕微鏡を使って観察した動植物の微細構造を示した図を掲載した「顕微鏡図譜（Micrographia）」を出版しましたが、その中のコルクの図で、細胞壁に囲まれた空間をcellと名づけた

した。cellは、小部屋を意味するラテン語cellulaに由来し、ここで初めて、生体の最小単位として、細胞（cell）という用語が使われました。フックは、多才な人で、力学や物理学、天文学にも造詣が深く、弾性体の伸びに対して張力が比例することを示したフックの法則にも名を残しています。フックが使った顕微鏡は、現在、ワシントンD.C.の国立健康医学博物館に保存されています。（下図）



時代は進み、18世紀末になると、色収差が除かれたレンズを使用することで顕微鏡の性能が格段に向上し、標本作成技術も向上したため、組織の微細な観察が可能になりました。これを受けて、1838～1839年にシュライデン（Matthias Jakob Schleiden）とシュバン（Theodor Schwann）がそれぞれ、植物や動物は細胞から構成されているという細胞説を唱えました。

1850年代に入り、ドイツの病理学者ウィルヒョー（Rudolf Virchow）が次の三点に要約される細胞説を提唱しました。

- (1) すべての生物は細胞から構成されている
- (2) 細胞はすでに存在する細胞からのみ生成される
- (3) 細胞は生命の最小単位である

これによって、細胞の質的、量的変化に基づいて、病気が発生することが明らかにされ、「細胞病理学」の概念が成立しました。これにより、Virchowは「近代病理学の父」と呼ばれています。

更に、光ではなく電子で結像させる電子顕微鏡の登場は細胞内部の微細構造を明らかにし、医学・生物学を大きく発展させました。この他にも蛍光顕微鏡、位相差顕微鏡、共焦点レーザー顕微鏡などの新しい技術が開発され顕微鏡の世界が大きく広がりました。

最近では、コンピューター技術を駆使したバーチャル顕微鏡（バーチャルスライド）が導入されるようになり、本学でも今年から病理学実習はiPadを用いて行っています。